群馬大学社会情報学部研究論集　第７巻　105—123頁　2000

ジェイムズ・ジョイスの「下宿屋」

南　谷　覺　正
外国文化第一研究室

A Reading of "The Boarding House" by James Joyce

Akimasa MINAMITANI
World Civilizations

Abstract

This essay is an attempt to closely analyze "The Boarding House" in *Dubliners* by James Joyce. It reveals the structural ingenuity of the story, and examines the motives, both overt and covert, of the main characters. Depending on the perspective, Mrs Mooney's character can be interpreted in a number of ways, as may the implications of Polly Mooney's reverie.

「下宿屋」("The Boarding House") は、「思春期」の４つの作品群の最後に位置する、『ダブリンの人々』７番目の物語である。1905年の７月初めまでには完成されており、弟のスタニスラウスに宛てた手紙には、その出来栄えに極めて満足している旨が記されている。(1)

*

Mooney 夫人は、肉屋の娘で、父親の店で働く Mooney と結婚し、Spring Gardens に肉屋を開いたが、Mooney は、義父が死ぬと途端に飲んだくれ始め、店の金に手を付け、借金をこしらえ、揚句には、客の前で夫人と喧嘩をしたり、悪い肉を仕入れたりして、とうと

う店を傾けてしまった。ある晩、Mooney 夫人のところへ肉切り包丁を持って押し掛けるに及び、夫人は牧師に訴えて、子供２人を連れて別居する許可を得、夫には、金も、食事も、部屋も与えなかった。Mooney は、郡司（シェリフ）の下働きでもする他なく、一日中執行吏の部屋に座って、用事を言い付けられるのを待っていた。ムーニー夫人は、店に残っている金を引き上げ、Hardwicke Street に下宿屋を構えた。下宿人は、短期の下宿者と長期の下宿者の２種類に分かれ、前者には、リヴァプールやマン島からの旅行者がおり、時に旅芸人一座も泊りに来た。後者は、ダブリン市内に勤める事務員たちであった。夫人は、この下宿屋を巧みに、しっかりと切り盛りし、手綱を緩める時、引き締める時、見て見ぬふりをする時を心得ていた。長期の下宿人たちは全員が、彼女を “The Madam” と呼んだ。

下宿者たちは、職種や嗜好を同じくしており気が合っていた。ムーニー夫人の長男の Jack Mooney は、Fleet Street で “commision agent” をしていて、荒くれ者で通っていた。日曜日の晩には、Mooney 夫人の居間でよく親睦会が催され、旅芸人たちが芸を披露したり、Sheridan がワルツやポルカを踊ったり、即興で伴奏したりした。夫人の娘の Polly Mooney も、そこで唄を歌った。

Polly は、ほっそりした、明るく柔らかな髪、小さく豊かな口元、灰色の底に緑を湛えた目をした19歳の娘で、誰と話す時にも、上目遣いに見る癖があるので、“a little perverse madonna” とでもいう印象を与えた。最初 Mooney 夫人は、Polly を corn-factor's の事務所のタイピストとして働きに出していたが、“*a* disreputable sheriff's man” (Italics mine.) が、自分の娘と一言話をさせてくれと押し掛けて来るので、そこを辞めさせ、家に引き取って、下宿屋の仕事を手伝わせる事にした。Polly は至って快活な娘なので、彼女に、若い男と触れ合う場を持たせようというのであった。その上、若い男たちにしても、遠くないところに若い女がいると感じるのは悪くなかった。Polly は、若い男たちと flirtation を重ねたが、Mooney 夫人は、鋭い嗅覚によって、男たちの誰もが、時間つぶしに付き合っているだけで、本気ではないことを見抜いていた。そういう状態が久しく続いたので、Mooney 夫人は、Polly をタイピストの仕事に戻す事を考え始めた時、Polly と若い男の１人との間に何事かが起こりつつあるのに気づいた。夫人は２人をじっと見守り、自分の胸にだけ収めて口を出さないままでおいた。

Polly は、自分が見られているのを知っていたが、母親の執拗な沈黙の意味は紛れもなく伝わってきた。母親と娘の間に公然たる共謀があったわけでもなければ、公然たる許諾があったわけでもない。しかし、他の下宿人たちが、２人の仲を取り沙汰し始めても、夫人はまだ口を出さなかった。Polly は少し様子がおかしくなり、男は狼狽した。やがてついに、その瞬間だと判断した時、夫人は介入した。彼女は道徳的な問題を、肉切り人が肉を扱うように扱った。そして今度の場合、彼女は既に肚を決めていた。

初夏の、よく晴れた日曜日の朝であった。暑くなりそうであったが、爽やかな風が吹いており、下宿屋の全ての窓は開け放たれ、その窓から、風を孕んだレースのカーテンが通りに向かって膨らみ出ていた。George's Church の鐘が間断なく鳴り響き、礼拝に向かう者たちは、１人で、ないし連れ立って、教会の前の広場を横切っていった。その得々とした様子、さらには手袋をはめた手に携えた小さな書物が、彼らの目的を明示していた。Mooney 夫人の下宿屋では、朝食が終わったところで、食堂のテーブルには空の皿がひしめき、その皿の上には卵の黄色い筋やベーコンの脂身の切れ端や皮が着いていた。Mooney 夫人は、藁のクッション入りの肘掛け椅子に座り、召使の Mary が後片付けをするのを見ていた。テーブルが片づけられ、パン屑が集められ、砂糖とバターが仕舞われ、鍵が掛けられると、彼女は昨晩の Polly との会話を思い出し（reconstruct）始めた。

＊ ＊

境界は曖昧だが、物語のおおよそここらあたりまでが、比較的客観的と思われそうな、語り手の視点から物語られている。そしてそこからは、視点の重心は、Mooney 夫人の内部に移り、ややあって、舞台が上の階の Bob Doran の部屋に移されると共に、Doran 自身のそれにほぼ重ねられるようになる。続いて、そこへ Polly が入ってきて、Doran との、この物語唯一の、登場人物同士の短い直接交渉が、語り手の narration によって描かれるが、視点はすぐに再び Doran の内部に戻される。そして同じ視点移動の手法が、部屋を出て階段を降りていく Doran の描写にも反復される。そして最後に、部屋に残された Polly が、語り手の視点から描かれている。このように、短い物語の中に、かなり念入りな構成上、及び narration 上の意匠が凝らされているが、読者はさしたる違和感を感じる事なしに、登場人物の内と外を眺め、その irony や様々な綾を享受できるようになっている。*Ulysses* に通ずるようなこうした手法を、すでに自在に操っている23歳のジョイスの文学的老成ぶりは特筆するに価するであろう。

さて、第２部の Mooney 夫人の「意識の流れ」の部分は、何気なく書き流されているように見えるが、ここにも緻密な計算が働かされていて、夫人の意識のありようを端的に示す３つの部分に分かれている。最初は、昨夜の Polly との会話の “revery” で、次が、これから意図している、Doran との会見で披露するであろう、彼女の弁論の筋書きのリハーサル、そして最後が、彼女の論理の裏に隠れている、Doran について彼女が握っている、切り札となる情報や判断の確認である。こうした煉瓦積みめいた単純かつ堅固な意識構造は、“a butcher's daughter” という出自、“a big imposing woman” とか、“decisive expression of her great florid face” といった容貌、“quite able to keep things to herself” とか、

“ [deal] with moral problems as a cleaver deals with meat” といった性格、そして、夫を家から締め出してしまったり、娘を思い通りに動かしてきた実績と相俟って、読者に “invincible” な強い印象を与え、それを Doran の小心翼々たる意識と対比すると、勝負の帰趨は自ずと明らかになるのである。

第1の、昨夜の Polly との会話の追憶の部分を取り上げてみよう。

[A] Things were as she had suspected: she had been frank in her questions and Polly had been frank in her answers. Both had been somewhat awkward, of course. She had been made awkward by her not wishing to receive the news in too cavalier a fashion or to seem to have connived and Polly had been made awkward not merely because allusions of that kind always made her awkward but also because she did not wish it to be thought that in her wise innocence she had divined the intention behind her mother's tolerance.(2)

ここで、読者は Doran と Polly の間に、何らかの性的な出来事があったのであろうと推測を働かせるのだが、この passage では、母親と娘が、暗黙のうちに互いの意図を了解しあっているにもかかわらず、それを表立って認めあうわけにもいかないので、知っていて知らないふりをするという、幾分笑いを誘われるようなぎこちなさが前面に押し出されている。Doran が、Mooney 夫人と Polly という2人の女性に搦め捕られるという構図は、「下宿屋」の前に配置されている「二人の伊達男」が、様々な機微に充ちてはいるものの、表面上は、2人の男が、1人の女性を餌食にするのと、丁度対を成す格好になっている。Doran も、“He had a notion that he was being had.” と、その危険を意識している。階段を、追い立てられるように降りていく Doran には、明らかに屠殺場へ引かれていく哀れな食肉用動物のイメージが重ね合わされている。

しかしこの文章は、同じ語彙、同じ syntax が繰り返されているという点でも注目される。無論、これは、Mooney 夫人の意識の内部に視点を置いて書かれたものであるから、純然たる地の文章とは区別しなければならないが、重複を極度に忌避する英語という言語的体質に照らしてみれば、意図的と考えてよさそうである。

Mooney 夫人の意識の第1の部分と第2の部分の転換の契機として、George's Church の鐘の音が効果的に使用されている。興味深いのは、通常であれば、鐘の音が鳴り始める事で物思いから醒め、現実に立ち戻るのであろうが、ここでは、“Mrs Mooney glanced instinctively at the little gilt clock on the mantelpiece as soon as she had become aware through her revery that the bells of George's Church had stopped ringing.” と、鳴り止んだのを “revery” の中で意識して、「本能的に」現実に戻ろうとしている事である。時計を見たのは、時間を気にしている為で、現在11時17分。彼女はこの時刻を、Doran との面

談をすませて、12時の "short twelve" を Marlborough Street の教会で受けるには十分すぎると考えている。Hardwicke St. から、Marlborough St. の St Mary's Pro-Cathedral of the Immaculate Conception までは、距離にして1㎞もないから、慣れた足なら10分もかからないだろうが、娘の結婚話、しかも倫理的に由々しいものが絡んでいるらしい話を、30分以内で片づけられると踏んでいるのは、読者を唖然とさせるに十分である。さらに次を読めば、彼女が実際に Doran を階下に呼んだのは、11時30分頃だったと想定できるし、面談に費やした時間は、階上の Polly が1人になってから下から声が掛かるまででもあるから、両者を総合して考えれば、20分を超えたという事はまずないであろう。娘の事を考え始めるのも、食卓の片づけと砂糖とバターの保管が優先しているようでもあり、ジョイスのペンは、satire というよりは、farce 的な興を求めているらしく感じられる。

因に、夫人が何故鐘を鳴り響かせる近くの George's Church に行かないで、Marlborough St. の教会に行くかといえば、その名の示すように (St George は England の守護聖人、聖母崇拝は旧教のみ)、前者は、Church of Ireland、つまりイギリスの息のかかったプロテスタント教会であるからだ。アイルランドの主要な教会は占領国イギリスに接収されてしまい、旧教を墨守するアイルランド人は、"Pro-Cathedral" の名称が示すように、temporary なカテドラルで間に合わせなければならなかった。Hardwicke や Marlborough といった通りの名前が、イギリスの大立者の名に由来するのは言うまでもないだろう。

さて Mooney 夫人にとって、Polly を嫁がせるのは、下宿屋で働かせ始めてからの長期的目論見であったはずだが、その決定的瞬間においても、これだけの割り切った efficiency の中でのみ考慮しているということは、世間一般の母親らしい、娘に対する共感や情愛は、Mooney 夫人にあっては、極めて薄いと結論してよさそうだ。自分の勝利を確信した夫人は、"... she thought of some mothers she knew who could not get their daughters off their hands." と、娘をいつまでも嫁がせずにいる他の母親に対する得意の気持ちを見せている。となると、彼女にとっては、娘は、なるべく早く捌いてしまいたい商品的な意味合いを帯びているという事だ。事実、彼女の思索の最後には、"She knew he had a good screw for one thing and she suspected he had bit of stuff put by." とあり、Doran の給料と貯金に目をつけている事が漏れている。それは、娘のためというよりは、自分のためにと考えられる節があり、Polly の結婚は、夫人にとって、business の色彩が濃い。Polly の、下宿の他の男たちとの flirtation を見ていた夫人は、"none of them meant business" との判断を下している。これは「語り手」の narration であり、mean buisiness は、「本気である」という意味の口語表現には違いないが、「語り手」は夫人の意識した言葉をなぞっていて、そしてその言葉は、その原義を betray しているのかもしれない。Doran の意識を叙し

た部分で、"... her mother's boarding house was beginning to get a certain fame" というくだりがあり、結婚相手についての否定的な面を列挙している部分だから、これは悪い風聞に違いない。夫人が "The Madam" と呼ばれている事、この下宿屋には、Liverpool や Isle of Man からの流れ客が宿泊し、"artistes" が出入りし、日曜ごとの「親睦会」が、唄や踊りや "obsenities" が、性的に loose な雰囲気を醸し出していたであろう事、また St Mary's という教会も、近くに "Monto" と呼ばれる売春地区を控え、"the pros' cathedral" という徒名がついていた事(3) などを考え合わせると、下宿屋の中で、何らかの性的紊乱ないし、"business" が行われるようになっていたと想像しても想像しすぎという事にはならないであろう。

Mooney 夫人の意識を辿った第 2 部で、夫人は自分の側に義のあることを再確認しているのだが、論理の体裁は取っているものの、結論は最初から出ている。"The question was : What reparation would he make?" 及び、"For her only one reparation could he make up for the loss of her daughter's honour : marriage." ——この style を、"She dealt with moral problems as a cleaver deals with meat." と形容するのは、正に言い得て妙と言うべきであろう。

Mooney 夫人の意識描写の第 3 部は、夫人が、Mary に命じて Doran を呼びにやる前に、手持ちの切り札を再確認する条である。"He was a serious young man, not rakish or loud-voiced like the others. If it had been Mr Sheridan or Mr Meade or Bantam Lyons her task would have been much harder. She did not think he would face publicity." という部分には、生真面目な性格の Doran が、"publicity" には耐えられないだろうという読みがある。また、"Besides, he had been employed for thirteen years in a great Catholic wine-merchant's office and publicity would mean for him, perhaps the loss of his sit." という箇所では、同じく "publicity" が職を失わせる十分な根拠になるであろうと、現実的な脅威を武器にしようとしている。そして、第 2 部も、第 3 部も、それぞれ、"She was sure she would win." と "She felt sure she would win." と、ほぼ同一の確信で始められているのは、常に勝者となるべく運命づけられた(と自分が信じている)彼女の思考様式を象徴的に物語っている。

しかしこの部分には、所謂語るに落ちるという、dramatic irony も含まれている。その一つは、おそらく Doran は、下宿人のうちで、彼女の最後の選択だっただろうという事である。34、5歳の Doran と、19歳の Polly では年齢的な懸隔はやはり大きいと言わざるを得ない。"He was a serious young man ..." と、結婚相手として相応しい事を自分に納得させる時には、Doran を褒めるようにして若者の範疇に入れているが、その直前には、"He was thirty-four or thirty-five years of age, so that youth could not be pleaded as his

excuse ...” と、若くないほうが自分にとって都合がいい時は、若者の範疇から除外している。さらに、彼女は、Mr Sheridan や Mr Meade や Bantam Lyons よりもましだと考えているようだが、Doran の、眼鏡を掛けて辛気臭く、すぐに上気して汗をかき眼鏡を曇らせる外貌や、くよくよと優柔不断な、意気地のなさそうな、男性的な魅力に欠けていると言わざるを得ない性格を見ると、おそらく Polly との間に先に flirtation があったに違いない、Mr Sheridan や Mr Meade や Bantam Lyons の方が（少なくとも前 2 者、なぜなら前 2 者には Mr をつけ、Bantam Lyons とは格付けに差を設けている）、「花婿」候補としては上であったと思われる。Doran は、夫人が Polly をタイピストの仕事に戻そうかと考えている時に、急に網に掛かってきたのであって、そこには、夫人の眼中には最初はなかったという含みが読み取れる。

夫人は、“publicity” を、Doran を陥落させる最終的な決め手として懐中にしているようだが、よく考えてみれば、“publicity” は Polly にとっても大きな、というか、Polly にとってのほうがより大きな傷になるはずである。しかしその脅威は夫人の思考の中には毫末も感じられない。すると、先に夫人が強調している “her daughter’s honour” も、ただ戦術的な意味合いで持ち出しただけの空疎な言葉に過ぎないという事になりそうである。

* * *

舞台は階上の Doran の部屋に移る。3 日分の無精髭が顎に伸びている。剃ろうと 2 度ばかり試みたのだが、手が震えて剃れず、あきらめざるを得なかった。顔から出る汗の蒸気で眼鏡が曇るので、2、3 分毎に、それを外してはハンカチで拭かなければならなかった。昨夜の教会での告白の記憶が、痛みを齎していた。司祭は、滑稽なまでに微細な点まで聴き質し、最後に、彼の罪を途方もなく拡大して見せたので、彼は reparation（償い）という逃げ場が与えられると、それに感謝したい程であった。被害を与えてしまった以上、結婚か逃亡か以外に道があろうか。知らぬ顔で押し通すなどは自分には出来そうもない。今度の事は必ず人の噂に上り、会社の方でもきっと聞きつけるだろう。ダブリンは狭い町だ、誰も彼もが、互いの事を知っている。彼の上ずった想像の中に、年老いた Mr Leonard が、例の耳障りな声で、*Send Mr Doran here, please.* というのが聞こえ、Doran は心臓が喉元まで込み上げてくるような気がした。

Doran の気の弱い、小心翼々ぶりが、Mooney 夫人の「逞しさ」と対比的に、やはり farcical に描かれている、この、Doran の「意識の流れ」第 1 部には、Doran の頭の中の混乱がそのまま反映している。「首になればこれまで営々と続けてきた勤勉が水の泡となる」→「確かに若いころは自堕落な生活も送ったがそれは過ぎた事だ」→「まあ、今でも残っている

要素もあるが、宗教的務めは果たしている」→「結婚に必要な資金がないわけではない、問題はそれではない」→「Mooney の家柄はあまりよくないので周りの反応が心配だ」→「Polly の英語も間違った品のないものだ」→「しかし愛情があれば文法は問題ないだろう」→「Polly のしたことで彼女を好きになるべきか、軽蔑すべきかどうか」→「自分もそれをしたのではあるが」→「一度結婚すれば、それでおしまいのような気がする」というふうに、最初は、知らないで通そうとすれば失職するのではないかという不安な想像から、自己弁明に流れていくかと思えば、次には結婚するとすれば、周りの反応等、様々な否定的な心配が思い浮かぶといった具合に、一貫性がなく、ふらふらとあてどもない状態に終始している。しかし読者から見れば、結論は最初から出ているようなもので、ただその逃れようのない結論の周りでうろたえているに過ぎない。

"But that was all passed and done with ... *nearly*." とか、"... and for *nine-tenths* of the year lived a regular life." (Italics mine.) とか、若い頃の逸脱を、現在のしっかりした生活で自己弁護しようとする箇所には、逆にその解れも漏れてしまい、相変わらずの煮え切らない性質が露呈されていて、読者の苦笑を誘う dramatic irony になっている。1年の1割といえば、それほど少なくはない日数になってしまう。*Send Mr Doran here, please.* という Mr Leonard の耳障りな声も、何度か聞いたのでなければここで想起されるはずもない。そうすると彼の自負する "All his industry and diligence" というのも、多少割り引いて受け取ったほうがよさそうだ。事実、朝食にも降りていかず、11時を過ぎてもベッドに座っている Doran の昨夜は、おそらく "regular life" に属してはいまい。彼の思考の混乱と手元の覚束なさは、宿酔にも起因しているのかもしれない。これだけの不安を抱えて、この神経質な男が酒に逃避を求めなかったとは想像しにくいのである。

もう一つの、表面には出ていない構成上の技法は、George's Church の鐘の音である。Mooney 夫人の思考と、Doran の思考は、場所が異なるだけで、時間的にはほぼ同時進行していると考えて差し支えない。すると、どの窓も開け放たれたこの下宿屋には、鐘の音は自由に進入することが出来、当然ながら、Doran の耳にも忍び込んでいるはずである。夫人が、それを聞きながら、昨夜の娘の告白を思い出していたように、Doran は、昨夜の教会での牧師に対する告解を思い出している。鐘が鳴り止んだ事が、夫人の思考の転換の契機になっているが、Doran の場合はどうなのであろうか。憶測を逞しくするしかないが、彼の思考の最後に、"His instinct urged him to remain free, not to marry. Once you are married you are done for, it said." と独身男性の本能が頭を擡げているところを見ると、その前までには、イギリス支配の響きを持つ鐘は、アイルランド人を麻痺したような "revery" に追いやるその peal を止めていたものと思われる。いずれにせよ、ジョイスがそれを隠し味に使用していることは確実で、Doran の眼鏡の曇りとともに、秀逸な文学的技

巧になっている。

そして Polly が部屋に入って来て、昨夜母親に全部打ち明けた、午前中に母から彼に話がある事になっていると告げ、どうしたらいいのかと、泣いて両腕を Doran の首に巻きつけてくる。Doran は大丈夫、心配しないでもいいからと慰める。その時、彼の身体に伝わってくる "the agitation of [Polly's] bosom" によって、Doran の第 2 部とも言うべき、記憶が蘇ってくる。

[B] He remembered well, with the curious patient memory of the celibate, the first casual caresses her dress, her breath, her fingers had given him. Then late one night as he was undressing for bed she had tapped at his door, timidly. She wanted to relight her candle at his for hers had been blown out by a gust. It was her bath night. She wore a loose open combing-jacket of printed flannel. Her white instep shone in the opening of her furry slippers and the blood glowed warmly behind her perfumed skin. From her hands and wrists too as she lit and steadied her candle a faint perfume arose.

これは、Doran の記憶をなぞったものだから、客観的な Polly 像ではないかもしれないが、Polly のほうからかなり露骨な seduction があった可能性が判じとれる。続いて、夜遅く寝静まった下宿に Doran が帰ってきた折々に、Polly が夕食を暖めてくれた事、寒い夜、雨の夜、風の夜には、いつも決まって "a little tumbler of punch" を用意してくれた事、上の階に 2 人で上がっていって、3 番目の踊り場で、"... exchange reluctant good-nights. They used to kiss. He remembered well her eyes, the touch of her hand and his delirium ..." ——ここには、「アラビー」と共に、『ダブリンの人々』の中では数少ない、女性の性的蠱惑の記述がなされている。Polly のそれには、「アラビー」の少女の神秘的な妖しさはなく、技巧的な安っぽさが目立つものの、Doran の "delirium" を引き起こすには十分で、男を迷わせ虜にする Circe 的な魅惑という点では共通したものがある。そのために、折角、自分の咎とばかりはいえないとして批判的に始められた省察も、途中で甘美な記憶に溶けて消えるかのような格好で、Doran は、"What am I to do?" という Polly の言葉を復唱して、元の木阿弥になってしまう。

Doran は Polly に対して、一般的な意味での愛情を抱いていると言えるのだろうか。Polly の性格についての肯定的な言及は、寒い夜、雨の夜、風の夜に punch を準備していてくれる事に対する "thoughtfulness" という評価だけであるが、それすらも読者の目には違った意味での "thoughtfulness" に映るであろう。Doran の記憶の中の Polly は圧倒的に官能的な存在であって、衣服の接触や、風呂上がりの足の甲の艶や、香り高い肌の下に透けて見えるような温かな血に至るまで、Doran は、断片化した性的刺激を神経質に感受し

ている。引用部［B］にある、“the curious patient memory of the celibate” という言葉は、そうした感覚に淫する Doran のような男の性癖をも暗示している。それは、告解室で他人の色事のこまごまとした細部を詮索する牧師にも通ずる、抑圧され萎靡した性の惨めな生理であろう。

しかし何よりも注目されるのは、Doran が、Polly との間に生じた性的な事態を “sin” と見なし、その “reparation” としてしか結婚を考えていない事である。それは、Mooney 夫人も同様であって、“reparation” は、Mooney 夫人、告解の牧師、Doran を結ぶ共通の認識として機能している。その宗教的な重い鎖が、Mary に呼ばれ階段を降りていく Doran の逃亡を命じる本能さえも呪縛し、一歩一歩、屠殺場へと彼を引きずり下ろしていくのである。

下宿屋は、近代の産物である。他所から流れてくる人間の受け皿として、都会の中で、彼らに孤立した空間を与え、この物語に描かれているように、別々の人間に思い思いの想念を紡ぎ出させる繭のような役割を果たしている。Doran は、若い頃には “wild oats” も蒔き、神の存在を酒場で否定し、今でも *Reynolds's Newspaper* という radical な新聞を購読している（懺悔しているように見えて、これらを語る Doran の口調には一抹の得意が感じられる）が、勤務は13年間、「まずまず真面目に」継続する中で、celibacy の貧相な自己満足の世界を紡ぎだして来たわけだが、今、その脆い世界が、２人の女性によって侵され破壊されようとしているのである。

* * * *

「思春期」という範疇にある「下宿屋」に於て、Doran をその主人公とするのは年齢的に困難である。すると、主人公は Polly という事にならざるを得ないが、彼女のどこに主人公らしさと、『ダブリンの人々』の枢機である epiphany が存するのであろうか。ともすると、圧倒的な存在感の Mooney 夫人と、哀感を漂わせる Doran の陰で、副次的な登場人物として霞んでしまいそうだ。Polly のイメージは、Leonard の指摘のように、(4) 物語の進行につれて変化していて、最初は、下宿屋の「親睦会」で歌う「快活な」“naughty girl” として現れ、Doran の記憶の中では、おずおずとした処女として振る舞い、そして最後の場面では、自殺を仄めかす、犠牲者としての女になっている。しかしながら、Doran が出ていった後の Polly は、少し泣いた後、涙を拭い、鏡の前に行って水で目元を整え、横を向いてヘアピンを留め直し、ベッドに戻って座り、枕を見つめる――

［C］She regarded the pillows for a long time and the sight of them awakened in her mind

secret amiable memories. She rested the nape of her neck against the cool iron bed-rail and fell into a revery. There was no longer any perturbation visible on her face.

She waited on patiently, almost cheerfully, without alarm, her memories gradually giving place to hopes and visions of the future. Her hopes and visions were so intricate that she no longer saw the white pillows on which her gaze was fixed or remembered that she was waiting for anything.

Polly の描写に関しては、視点は一度も彼女の内部に入り込まないので、読者は外面描写から彼女の心事を想像するしかないのだが、Doran には自殺をも辞さないような事を言いながら、その直後には、"almost cheerfully" に座って待っているというのは、先の言動がどれだけ本心から出てきたものか甚だ疑わしいという事になってしまう。Polly の上目遣いの表情を "a little perverse madonna" と描写した箇所があるが、"perverse" は最初の原稿では "hypocrite" であったという。(5) 内心を偽った外面を装うのが hypocricy であり、彼女が Doran に見せた、処女のようにおずおずとした様子や、犠牲者としての女の仕草が、男を籠絡するための見せかけであったとしたら、正に Polly は hypocrite であり、その本性は、彼女が歌っていた、"I'm a ... naughty girl. / You needn't sham : / You know I am." という歌詞通りの "vamp" だということになる。Mooney 夫人が階下から呼ぶ声に "revery" からはっと飛び起きた時の、"Then she remembered what she had been waiting for." という描写は、彼女が階下での成り行きを固唾を呑んで待っていたわけではない事をはっきりと示している。とすれば、彼女がどれだけ Doran を好きであるのかも定かではない。

そういう意味では、Mooney 夫人も Doran も、Polly 同様、心の中に truth と呼べるようなものを持っておらず、自分の形成したいささか滑稽で悲しい routine 化した生活の中に満足を見い出している近代都市の住民である。彼らも、真実の情感の衰弱、萎靡、枯渇を、外面で取り繕っているに過ぎない hypocrite の同胞であって、"reparation" や "honour" は御題目であり、本心は利害にのみ拘泥している。彼らは、"sham" であるという点において、取り澄まして George's Church に向かう彼らの敵と何の選ぶところはない。

* * * * *

最後の場面で、母親の呼ぶ声を聞いた Polly は、"... started to her feet and ran to the banisters." という行動を取っているが、前述したように、これは面談の結果を待ちわびて飛び出していったわけではないから、反射的な行動という事になる。つまり Polly にとって、母親の意向は、絶対的に服従すべきものであって、それが殆ど強迫観念化しているよ

うに見える。「思春期」の作品群の最初の一編「イヴリン」に於ては、狂死した母親が娘を呪縛していたが、それとは趣を異にしているものの、この「下宿屋」においても、母親の支配という事が隠然たる主題になっている。Polly は、タイピストの仕事に出されるのも、下宿に戻されそこの仕事を手伝わさせられるのも、男と flirtation を重ねるのも、Doran との結婚へと向かうのも、全て母親の意向を権能者のそれのように迎えようとしているのである。

実際、Mooney 夫人には、どこか司祭と通ずるようなところがある。日曜日の朝食の席は Mass の parody たりうるし、Polly の告白を聞くのは、Doran に対する告解師と相通じた役割を果たしている。そして何と言っても、自分の正当性と勝利を露疑わないその確固たる精神構造こそ、多くの因習的な宗教的精神構造に酷似していると言えよう。

しかしもう一方で、"She was a woman who was quite able to keep things to herself : a determined woman." という冒頭部の文章には、もう少し深い含みがありそうだ。Mooney 夫人自身は、不幸な結婚の犠牲者という格好で narration が進められていくが、Mr Mooney の "He was a shabby stooped little drunkard with a white face and a white moustache and white eyebrows, pencilled above his little eyes, which were pink-veined and raw ..." という容貌と、夫人の血色のいい堂々たる体軀を並べてみると、活力を搾取されていた犠牲者は Mr Mooney のほうだったかもしれないという気がしてくる。事実、別居によって夫婦の明暗ははっきりと分れ、割を食ったのは明らかに Mr Mooney の方である。夫人は、追い出した夫に、金も食事も部屋も与えることを拒んだ、という部分を見ると、別居前から夫の生活管理はかなり厳しいものであったに違いない様が浮かんでくる。女中の働きぶりを監督し、パン屑を集めさせて翌々日のプディングを作ろうとしている節倹ぶりや、バターと砂糖の保管場所に鍵をかけさせる用心深さなど、Mr Mooney がどのような類いの待遇を受けたかを偲ばせるに足る。Mr Mooney は店の金に手をつけ始めたというが、飲み代が頑として渡されなければ他に方途はないであろう。口論したところで敵う相手ではなし、肉切り包丁でも突きつけない限り、小遣い銭をせびり取ることは出来はすまい。つまり Mr Mooney は、俗に言う「飼い殺し」状態に置かれていたという事になるのであろう。

いや、読者はもっと疑って然るべきかもしれない。夫人の父親が死ぬとすぐに Mr Mooney は飲んだくれ始めたとあるが、Doran を網にかける手管の見事さを見てきた読者は、Mr Mooney も同じ手口で操られたのではないかと疑う十分な理由を持つのである。父親が死んで抑圧から解放されたのはむしろ夫人のほうだったのではないか。夫を締め上げていけば酒に走り、店の金を着服し、悪い肉を仕入れ、負け戦の口論を挑み、やがて進退窮まって刃傷沙汰を試みるのは自然の理である。そうした世間の因習を味方に出来る既成

事実を作った上で、牧師のお墨付きを得て別居し、肉屋を畳んで下宿屋を開業し、娘に entertainer を務めさせ、息子に用心棒をやらせる…。

Mooney 夫人の人心操作術には、尋常ならざるものがある。女中の Mary と等しく、黙っていても、Polly はその意を汲んで、夫人の筋書き通りの行動を取っている。一度、周りに噂が立ち始めた時、おそらく Polly は夫人の介入を期待していたのであろう。しかし夫人は沈黙を続けた。すると "Polly began to grow a little strange in her manner and the young man was evidently perturbed." と、Polly の様子が目に見えておかしくなり始める。おそらくこれが、Doran が "He could not make up his mind whether to like her or despise her for what she had done." という表現で暗示している Polly の行為と、直接ないし間接に繋がりを持っているのであろうが、そうなると、夫人の沈黙に籠められた指令は、Polly を奇異に振る舞わせるほど激しいものだったと推察できるだろう。そしてその後で、つまり、世間の因習を味方にできる既成事実を作った上で、夫人は介入する。

もう一度引用部［A］を読み直してみよう。先に指摘しておいた、語彙、syntax の、故意とも見える反復使用は、そうした消息と関連がありそうだ。夫人は、自分の意が娘に通じていた事を知っていて知らないふりをするのでぎこちなくなったと言うのだが、もう少し正確に言うと、知って知らないふりをするのでぎこちなく振る舞うべきことを知っていたのである。すると、Polly はその指令通りに、母親が知っていたことを知っていながら知らないふりをするぎこちなさを、合わせ鏡のように演じてみせるのだ。一見、humorous に見える文章だが、これが、Mooney 夫人が "reconstruct" したものであるのを忘れてはならない。Mooney 夫人はそう思い出したがっただけの事であって、Mooney 夫人のどこを探せば、こうした awkwardness が自然に生まれてくるような naïvité が見つかるというのだろう。

さらに同じ線で考察を進めると、下宿屋の階下と階上の部屋で、Mooney 夫人と Doran が synchronistic に追憶や思考を行っているわけだが、夫人が勝ちを確信するその全く同じパラダイムで、Doran は敗者の思考を行っていることになる。恰も、Doran が夫人が期待する通りの考えを考えさせられているといった趣すらある。20分以内で決着が着けられるという夫人の予想は、最初は farce として読めるのであるが、再読すれば、冷厳な読みに裏付けられたものだという事になる。Polly の Doran の部屋への登場、階段で Jack が出会う事なども、予め定めてあったように効果を発揮している。Doran は susceptible な性格であって、"What am I to do?" という Polly の言葉が伝染して、精神状態を一層萎えさせるくらいだから、階下の夫人の醸し出す得体のしれない磁力に最初からすっかり麻痺させられているかの如くにも思われるのである。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

物語の最も重要で難解な部分は、引用部[C]にある。文章は特異な雰囲気を持ち、様々な綾に充ちていそうな感触がある。この時、Polly は一体何を考えていたのだろうか。“hopes and visions of the future” とはどのような性格のものだろうか。Polly は、ベッドに戻ると、枕を長い間見つめていて、それが “secret amiable memories” を呼び覚ますが、それは Doran との間のものなのか、それとも Doran に限った記憶ではないのか、はっきりしない。いずれにせよ彼女は、首筋を冷たい、ベッドの鉄棚にもたせ掛けながら(「アラビー」の少女も、鉄棚を握ったのが思い出される)、そうした思い出から、“revery” に入っていく。

階段を下りていく Doran は、“He longed to ascend through the roof and fly away to another country where he would never hear again of his trouble ...” というふうに、一瞬だけ、逃避の果無い願望に身を焦がしている。彼をここまで追いつめたのは Polly だが、先に見たように、Polly 自身も、自分の意志でそうしたというよりも、母親の暗々裡の指令に忠実に従っているだけで、その逼塞的な事は Doran にも劣らないであろう。そうなると、彼女にも逃避の衝動は強く働いているはずで、この夢想は、彼女の渇を癒してくれるしばしの休息になっているのかもしれない。

事実、Doran の部屋に1人取り残された Polly の行為は、幕間に楽屋で寛ぐ女優のそれを思わせる。泣く演技が終わると、次の階下での演技に備え、顔を直し、おそらく Doran の横に座ることになるのであろう事を想定しているのか、鏡で横顔を見ながらヘアピンを調整している。それが終わって残された僅かの時間が、何の演技の必要もない、素顔の自分でいられる時間だ。“hypocricy” の語源は、「劇場での演技」であるという。ベッドの端に座り鉄棚に首をもたせかけてじっと枕を見つめている Polly は、もはや “naughty girl” でもなければ、おずおずとした処女でもなく、まして自殺しそうな思い詰めた女でもない。彼女の表情には、そのどれにも属さない、1人きりの時にのみ見せる、“hypocricy” でないものがある。そして “hopes and visions” に没入していくわけだが、それが極めて “intricate” であるという事は、それが、この場で唐突に沸いてきたものではないという事を暗示してはいまいか。つまり、それらは、これまで自分の部屋で1人きりになれた時に、時間をかけて、丁度波が岩に複雑な洞窟を穿つように刻まれて出来た “hopes and visions” なのかもしれない。Doran がいる時には、Doran の横の、ベッドの中央部に腰をかけていたのが、Doran が出ていった後、一度立って鏡のところへ行き、戻ってくると今度はベッドの端に座り直し、そして首をベッドの鉄棚にもたせかけている。どうやらそれは、彼女

が自分の部屋に１人でいる時、“revery” を呼ぶために、いつも取っている姿勢なのであろうかと思われる。

「下宿屋」の登場人物は、*Ulysses* に再登場してくる。Bob Doran はひどい飲んだくれの男で――

[D] Fitter for him go home to the little sleepwalking bitch he married, Mooney, the bumbailiff's daughter, mother kept a kip in Hardwicke street, that used to be stravaging about the landings Bantam Lyons told me that wasstopping there at two in the morning without a stich on her, exposing her person, open to all comers, fair field and no favour.(6)

というふうに、果たせるかな、Polly と夫婦になっており、Polly は「夢遊病のあばずれ女」に、Mooney 夫人は、目を覆うべき露出狂になっている。もし、この両作品の間に、何らかの本質的連関を作者ジョイスが意識しているなら、「下宿屋」の Polly の最後に見せる表情は、将来の夢遊病に進展する運命を持った、病的な胚珠を宿している事になる。既に指摘したように、Mooney 夫人の、物事を自分の一存に封印しておける能力は、女性には例外的な美質とも言えるかもれないが、一方で、何もかも、予め筋書きを決めてしまって、周りの人間にその筋書きからの逸脱を許さないという圧制的な面も持っているわけで、Polly はその最大の犠牲者であるとも言えよう。そうなると、唯一残された彼女の自由は、自分の時間に、空想の世界に幸福の illusion を築き上げる事である。錯綜した迷路のような希望や幻想は、母親の支配の届かない、皮肉にも、母親の胎内に似た慰安を与えてくれたのかもしれない。そういう意味では、Polly と「姉妹たち」の「神父」との類似も指摘出来よう。

何もかも専断的な Mooney 夫人は、宗教的陰喩のレベルでは、司祭的な、ないしは、誇張して言えば、皮肉にも “predestination” の教義に基づく謹厳な「神」的性格を帯びている。George's Church の鐘の音を聞きながら生活し、St Mary's に通うという分裂の中での生存は、彼女に一風変わった処世術を教えたのかもしれない。George's Church の鐘が鳴っている間、Mooney 夫人は、やはり “revery” に身を浸している。“revery” が一種の逃避場所になっているのだ。鐘が鳴り止むと、“instinctively” にそれに気づいているのは、読者は笑っていられるが、底には痛ましい歴史的事実がある。そのような悲しむべき精神的習性の中で、彼女は心の中に、自分の宰領に都合の良い、巣のような、空想的書割を形成したのであろう。母と娘は、本質的には、見かけよりはずっと似ているのである。しかしそこで「性」を、自分の思い通りになる “business” として、自分の恣意通りに演出してしまえば、生存には真に簡便であろうが、やがて「性」のほうからの恐るべき復讐がやっ

て来るかもしれない。

何もかも専断的な Mooney 夫人は、劇場の陰喩のレベルでは、劇作家ないし演出家に喩えられるだろう。Polly は、その書かれたシナリオに従って役を演じる女優という事になる。下宿屋の日曜の晩の「親睦会」では、男に気を持たせるような猥雑な歌を歌うのが彼女に期待されている役割である—— "I'm a ... naughty girl." 云々。ところで、ここにある省略符号は何を意味しているのだろう。Gifford が、Zack Bowen の *Musical Allusions in the Works of James Joyce* (Albany, N.Y., 1974) から転載している原歌を見ると、この部分は、第1スタンザの途中に出てくるもので、"I'm a naughty girl / You needn't sham / You know, I am!" と、"a" と "naughty" の間には省略はない。(7) という事は、その省略記号は、Polly がそこを歌う時に取った pause を表すものだと解釈できる。では、なぜ彼女はそこで pause を取ったのだろうか。色々な可能性が考えられる。例えば、自分が virginal であるのに、こうした歌を歌わせられるのは恥ずかしく、困惑させられる、という魅力的なはにかみを意識して演出しているのかもしれないし、逆に、そこを聴かせどころにして、男たちの聴衆をじらす格好で、下卑た喝采を誘ったのかもしれない。Leonard は、Polly が誰と話す時にも上目遣いに見るという癖と関係づけ、この時に、周りの男たちに上目遣いの流し目を送っていたのだと解釈している。これも興味深い解釈と言えようが、ここはほんの一瞬の pause でしかないだろうから、誰にも彼にも視線を送っている暇はないだろう。歌詞の前の部分は、"I'm an imp on mischief bent / ... / On my mistress tricks I play, / Telling her what love should say, / Whispering what love should do ; / She believes and does it too!" という、男の科白になっているから、この曲はデュエット曲として意図されたものかもしれない。そうなると、秋波を送るとすれば、その時一緒に歌っている男と考えるのがよいかもしれない。しかしどの可能性を考えたところで、安っぽい、素人臭い技巧には違いない。

引用部[B]の、Doran を誘惑する場面では、夜、風呂上がりに、緩やかなローブを身に纏い、あちこちから香水の香りを立ち昇らせ、艶やかな肌をちらつかせながら、着替えをしようとしている Doran の部屋を訪れ、ドアを "timidly" に叩き、蠟燭の火が消えてしまったから、火をつけさせて欲しいというのは、あまりにも拙劣で、見え透いた演技としか言えない。尤も Doran は、その意図を薄々感知しながらも、知らぬ振りを装いつつその演技を演技と知らずに、困惑した表情の裏で楽しんでいたのであろうけれども。

そしてこの日、Doran の部屋を訪れた Polly は、"O, Bob! Bob! What am I to do? What am I to do at all?" と Doran にとり縋って泣き、自殺を仄めかすが、これも、これ以上は考えられないほど banal で、安っぽく、Doran が部屋を出る時の "*O my God!*" に至っては噴飯物である。しかしこれらの演技は、いずれも、Polly の自発的なものというよりは、

Mooney 夫人の意向に沿ったものであれば、勢いとってつけたような演技になるのは致し方のない事であろうと思われる。

* * * * * * *

ところで、Polly と Doran の間には、いったいどんな出来事があったのだろうか、決定的な事実は書かれていないので、ここでも読者は想像を逞しくする事を余儀なくされる。Doran の "He could not make up his mind whether to like her or despise her for what she had done. Of course, he had done it too." という記憶の中の "what she had done" は、その決定的な行為に言及していると思われ、何となく変則的な含みがありそうな表現だが、Polly の方から何らかの積極的な挑発があった事はまず間違いがなさそうだ。また、Mooney 夫人が、自分の事を "outraged mother" と称している事(outraged は、outraged maiden のように使用される)、Doran が自分の行為を、"harm" とか "sin" といったふうに言及している事、Polly が自殺を仄めかしている事などから考えて、少なくとも所謂性的関係が結ばれたのは確実と考えていいだろう。ではそうであったとして、それはいつの事であったのか。昨晩、Polly は Mooney 夫人に、そして Doran は神父に、それぞれ告白を行っている。その翌日、Polly が Doran の部屋に入ってきて、母親に全部打ち明けたと話した時、Doran は当然の事を受け止めるように黙ったままである。Polly の軽くノックをして入ってくる入り方も、来ることが予め取り決めてあったように見える。(Polly は、Doran がノックに応える前にそっと入ってきたような書き振りだし、Doran も Polly の来意を聞いていない。)そうなると、2 人が告白に行った事も、どうやら協議した結果であるらしく、おそらくは、Polly が泣き、どうしたらいいのか分からない、というような田舎芝居的な愁嘆の結果、Doran はやむなく教会に告解に出かけていった様子がそこはかとなく浮かんでくる。ずっと以前に性的関係を持った事を今になって告白し騒ぎ立てるのも不自然だし、Doran の 3 日分の無精髭、それを剃ろうとして剃れない緊張ぶりを見ると、どうやら金曜日の夜に事が生じたと解釈するの一番無理がないように思われる。

* * * * * * * *

さて、引用部 [C] に再び目を戻してみよう。この部分は、最も皮相的には、Polly が、母親と暗黙裡に共謀して Doran を籠絡し、既に結果は火を見るより明らかであるから、安心しきって将来の甘い夢を見ているという事になろう。しかし、先に論じたように、その深層部では、Polly が、母親の支配に従うヘボ役者の役割を果たす合間に、つかの間の、幻

想の世界への逃避を行っているというドラマが進行している。だがそれだけで、この passage の雰囲気は完全には解明しきれていないような気がする。

"She waited on patiently, almost cheerully, without alarm, her memories gradually giving place to hopes and visions of the future." という文章のトーンには、どこか不思議に明るいものがあり、それが病的な逃避行為だと頭では納得しても、どうしても釈然としないものが澱のように残るのである。また Polly が鏡の前で横を向いてヘアピンを直すところも、男の読者がそう解釈したがるように、ただ単に、男を意識した技巧的な行為とは言えない、計算を度外視したような、心楽しげな、女性らしい自然な所作にも思えるのである。ベッドに座る時に、端のほうに座り直すのも、どことなく慎ましやかな趣を湛えている。"There was no longer any perturbation visible on her face." に見られる、静かな、ゆったりとした落ち着き——それは、あるいは、母となる予兆を本能的に知った女性の、神秘的な落ち着きに比べられるべきかもしれない。

日曜日の朝、教会の鐘が鳴り、風を孕んだカーテンが丸く膨れている。Mooney 夫人はこれから、St Mary's Pro-Cathedral of the Immaculate Conception へ出かけようとしている。conception の暗示は、テキストに瀰漫している。最初に言及した 1905年 7 月12日の書簡の中でジョイスは "a neat phrase of five words" という事を言っている（註(1)参照)。その 5 語がどれなのか、有力な候補は 2 、3 あるが、Ellmann は、"a little perverse madonna" だと考えている。hypocrite を perverse に変更しているなど、この phrase にはかなり周到な考慮が払われている証左である（hypocrite も前述した語源的意味から物語の本質に絡んでくるし、perverse も Polly の Circe 的な面、病的な夢想癖の暗示として本質的である)が、それなら、"madonna" という言葉にも、物語に対する重要な relevance を期待してもよいだろう。

Polly は、時々 *I seen* とか、*If I had've known* とかの品格のない英語を話す、教養のない、紳士淑女の眉を顰めさせるような唄を歌う、蓮っ葉な、下宿の男たちと次々に戯れる、節操のない、そんなに好きでもないであろう Doran を誑かそうと下手な演技ばかりを繰り返す、真実味のない、そして、結局は "sleepwalking bitch" に堕してしまう女に過ぎないかもしれない。しかし、新しい生命を宿す事は、おそらくその瞬間の女性にしか分からない、聖なる影によって、高貴な、清浄な felicity を告げられる事である。それは、その女性の人格云々とは全く無関係に聖別され、神秘の光彩の中で、その女性の辿りきれない謎の中で告知される。誰が Joseph を聖別したであろうか。そう思えば、最後の場面の Polly の姿には、adolescence の女性にしか見いだせない美しさと、蓮っ葉な女であるだけ一層強い poignancy を、読者の胸に忘れがたく印すのである。

——註——

(1) "Dear Stannie I send you tommorrow the fifth story of 'Dubliners' that is, 'The Boarding-House'.... I have also written the sixth story 'Counterparts'.... I am uncommonly well pleased with these stories. There is a neat phrase of five words in *The Boarding-House*: find it." (To Stanislaus Joyce, 12 July 1905. See *Letters of James Joyce,* edited by Richard Ellmann, Volume II (The Viking Press, 1966), p.92.

(2) テキストには、*Dubliners* (New York : The Viking Press, 1967) を使用した。

(3) John Wyse Jackson and Bernard McGinley, *James Joyce's* Dubliners (Sinclair-Stevenson, 1993), p.55 注釈参照。

(4) Garry M. Leonard, *Reading* Dublinrers *Again ; A Lacanian Perspective* (Syracuse University Press, 1993), p.134 参照。

(5) Warren Beck, *Joyce's* Dubliners *: Substance, Vision, and Art* (Duke University Press, 1969), p.147 参照。

(6) *Ulysses*, edited by Hans Walter Gabler et al. (London: The Bodley Head, 1986). p.249. ('Cyclops,' ll. 398-402)

(7) Don Gifford, *Joyce Annotated : Notes for* Dubliners *and* A Portrait of the Artist as a Young Man (University of California Press, 1982), pp.63-64.